

## 共同研究 「ニュータウンの未来像」

### 中間報告

西川 祐子

本研究は、「本大学に隣接する檳島グリーンタウン・向島ニュータウンを研究対象と定め、ニュータウンが現在直面する様々な課題を明らかにし、ニュータウンがこれからどこに向かおうとしているのかを探ることを目的として」（共同研究プロジェクト研究調書より）、2003年度より3年計画で実施するものである。ニュータウンを今後どう「ひらく」か、を中心課題にすえている。

（1）鉄の扉に象徴されるような閉じられた設計であるニュータウンの住空間を外部にたいしてどのように安全にひらくか、（2）個室への閉じこもりや1住戸単位の人間関係をいかに外へひらくか、また外のものをいかに、住戸や個室のうちへと受け入れるか、（3）一見したところそれ自体で完結したかのように見えるニュータウンが、どのように外と交流をおこない、どこへむかってひらかれてゆくのか、をニュータウンの人々とともに考えてゆく、などである。

第1年目は研究方法の模索と、ニュータウンの住人との関係の構築を目標にしていた。おりしも宇治市男女共同参画支援センターより、宇治市民むけシンポジウムを共同で企画し、実施しないか、という打診があった。研究会をかねた打ち合わせの回を重ね、その成果を宇治市男女共同参画支援センターと、京都文教大学人間学研究所と、科学研究費補助による基盤研究（C）「ニュータウンのジェンダー変容」研究班（代表、京都文教大学西川祐子）の共催によるシンポジウム「集まって暮らす\_ジェンダーをひらこう」に練り上げた。共同作業の経過のなかから「ひらく」の次のキーワード「つなぐ」が大きく浮かびあがってきて、共同研究とシンポジウ

ムのもう一つのテーマとなった。2003年11月29日に宇治市男女共同参画センターがある、市民交流プラザ「ゆめりあ うじ」4F大会議室を会場として行われたシンポジウムは会場に座席を増設する盛況であった。シンポジウムの詳細な内容は、本号に「シンポジウム報告」として掲載しているので、それを参照されたい。本共同研究にとっては、このシンポジウムには次のような意義があった。（1）ニュータウンを舞台とする建替えやネットワークの話題が身近な問題として聴衆に受け入れられ、ニュータウンをすべての人の近未来の生活を占うべき、社会の先端部分としてとらえることの大切さをあらためて確認することができた。（2）「ひらく」とともに「つなぐ」という大切なキーワードを問題意識の中心にすえることができた。（3）シンポジウムにより、地域と大学の交流を実現させることができた。これも「つなぐ」ことの実践であったと言えよう。（4）会場で記入を依頼したアンケートに多くの方が、それぞれの報告について大変長い感想文を書いてくださり、今後の研究のすすめ方にたいする貴重な示唆をいただいた。（5）同じくアンケートには、知見の提供を望むだけでなく、報告や討論に触発されて、まちづくりの体験、さまざまな文化活動の悩みや喜び、時代とともに生きた自分の人生を語る文章もふくまれていた。共同研究ではこれらさまざまな思いをくみあげ、もういちど住人におかえしする機会をつくる必要がある。共同研究員それぞれはシンポジウムによりあらためて自分の課題を確認したり、新たなテーマを発見したりした。ここからが発端である。